



平成19年3月発行

# 北海道がんセンターたより

独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター  
〒003-0804 札幌市白石区菊水4条2丁目3-54  
TEL 011-811-9111  
□ホームページ <http://www.sap-cc.org>

編集発行人:山下 幸紀



## 北海道がんセンターの理念

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼ある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。このため、

- 常に、医療の質と技術の向上を目指します。
- 研究、教育研修を推進し、医療・医学の発展に寄与します。
- 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
- 自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります。

## 「がん」と病理診断とテレパソロジー



臨床研究部長 山城 勝重

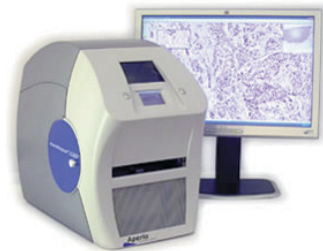
あなたの病気は胃がんですよとか、肺がんですよ、などと病名が患者さまに知らされますが、その前に医師は「がん」という診断を下していることとなります。その診断はどのようにして決まるのでしょうか？

放射線などを用いた「画像診断」も確かに診断ですが、「がん」の診断の場合は、顕微鏡でがん細胞を確認することがその他の診断に優先する診断方法と考えられています。

このために、がん医療を専門に行っている病院には通常、病理医という顕微鏡診断を専門に行っている医師が配属されています。病理医は、がん細胞があるかどうか、どんな種類のがん細胞なのか、がん細胞はどのような広がりをしているのか、などを病理診断報告書にまとめます。主治医・担当医はこれに基づいて、診断の内容や治療方法などを患者さまに説明し、今後のことを相談することとなります。ごく例外的な場合を除いて病理診断なしでがんの治療が開始されることはありません。このような大切な病理診断のために、当院には3名の病理医が配置され、病理診断の一分野である細胞診の専門医も8名おります。

がんの病理診断はとても重要なのですが、病理医の数は欧米のがん医療先進国と比べるとまだまだ少ない現状です。がん医療を行う病院どこでも病理医が雇用されている訳ではありませんし、複

数名配置されているところは道内でも数える程しかありません。厚生労働省はがん医療における病理診断の重要性に配慮し、「がん診療連携拠点病院」の選定に当たっては病理医が配置されていることが望ましいとし、また、病理医のマンパワー不足を補うシステムとしてテレパソロジー（遠隔病理診断）、バーチャルスライドといった最新技術導入も展望した病理医同士の相談（コンサルテーション）システムを運用することにしました。ごく簡単な言い方をすると、これはインターネットを通して、顕微鏡画像を遠隔地間で共有する仕組みといえます。当院はこの取り組みを始めてから10年、数千例もの経験をもつ国内でも有数の施設です。今後は道内・国内の施設との連携を図りながら、がんの病理診断の質向上をさらに進めていこうと考えています。



### — CONTENTS —

「がん」と病理診断とテレパソロジー.....	臨床研究部長 山城 勝重.....	1
ボランティアコンサート.....	庶務班長 若崎 由.....	2
手洗い・マスクで感染予防.....	感染対策係長 一戸真由美.....	2～3
薬剤師の役割.....	副薬剤科長 江口 久患.....	3～4

# ボランティアコンサート

庶務班長 若崎 由

平成19年1月12日、今年度、第2回目のボランティアコンサートを外来ホールで開催しました。

今回は札幌市内でボランティア演奏活動を行っている「喜楽会」の8名による民謡・三味線・太鼓の演奏会を行ったところ、入院患者さまが約100名ほど集まりました。

中には一緒に歌ったり、手拍子をとったりする患者さまもいてとても楽しそうでした。



最後は北海盆踊りでしめ、予定していた1時間の演奏会が無事終了しました。

今後、ボランティア委員会では、5月頃にパフォーマンスライブ、7月頃に交響楽団の団員による演奏会などを計画しております。

また、近いうちに患者さまの喜ぶ顔が見られることがとても楽しみです。



# 手洗い・マスクで感染予防

感染対策係長 一戸 真由美

## <院内感染とは>

院内感染とは、患者さまや職員などが病院内で感染を受けることをいいます。病院で感染を受け、退院後に発症した場合も院内感染です。ただし、入院前にすでに持っていた病原体で発症したものは院内感染とはいえません。

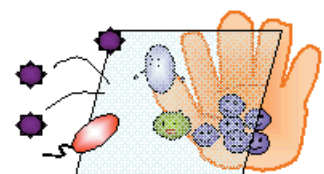
感染症は、感染力のある病原体・人・感染経路の条件がすべて揃うことで起こります。環境にいる病原体は掃除や消毒で減らせますが、ゼロにすることはできません。手洗いや手袋、マスクなどで感染経路を断ち切ることがもっとも効果的な感染予防策です。

## <免疫力が低下した人の日和見感染>

細菌など微生物はどこにでも存在しますが、普段は人間と上手く共存しています。例えば、皮膚にいる表皮ブドウ球菌などは、「常在菌」として外

から病原体が進入するのを防いでいます。更に、身体の中では白血球や免疫グロブリンなどが、侵入してきた細菌などと戦い身体を守っています。

しかし、病気や治療の副作用などで免疫力が低下すると、常在菌などの弱い菌から身体を守るのも難しくなり、感染症を起こすことがあります。免疫力を高められるとよいのですが、病気で治療する人の場合は限界があります。そのため、感染を受けやすいところに触れる手の清潔（手洗い）、身体の清潔、環境の清潔（清掃）、医療器具の清潔（洗浄・消毒・滅菌）がとても重要です。



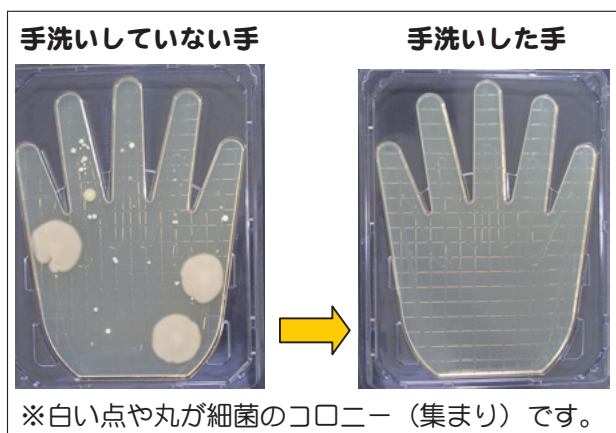


### <感染対策の基本は手洗い>

手は、さまざまなところに触れるため菌などがつきやすく、その手で身体に触れたり食事をしたりすることで、菌などが身体に入り込みます。院内感染の多くは、手洗いで防ぐことができます。

感染から身を守るため、患者さまや面会の方も、よく手を洗ってください。ぬれた手は菌が付きやすいので、洗った後はよく乾かしてください（ハンカチは他の人と共有せず清潔なものを使ってください）。

病室の入り口に付けてあるアルコール消毒薬も効果があります。医師や看護師が処置や回診など続けて多くの患者さまに触れるときは、手袋を使用したりアルコール消毒薬で手を消毒しています。



### <マスクの効果>

会話や咳・くしゃみなどで飛ぶしぶきが、他人の鼻・口などの粘膜に付着することで起る感染を「飛まつ感染」といいます。しぶきの水分が蒸発してから細菌やウイルスが空中にただよい、それを吸い込むことで起る感染を「空気感染」といいます（結核など）。インフルエンザは、飛沫感染・接触感染のほか、最近では空気感染するともいわれています。

マスクは、菌やウイルスが飛ぶのを防ぐ効果があるため、感染している人が着用する方が効果的です。急にくしゃみや咳が出る場合は、しぶきを飛ばさないようにハンカチやティッシュで押さえてください。免疫力が低い患者さまは、通常浮遊している菌やカビでも感染の原因になることがあるので、予防として着用を勧められることがあります。

医療用のサージカルマスクは、0.1ミクロンの粒子を95%以上遮断することが基準とされています（ガーゼマスクや薄い1重の紙マスクは、医療用より効果が低くなります）。



玄関前の医療用マスク自販機

## 薬剤師の役割

● 副薬剤科長 江口 久恵

お薬を専門に扱う薬剤師の紹介をします。病院の薬剤師にはいろいろな役割があります。

皆さんがよくご存知なのは、医師の処方せんに基づいて患者さまの薬を調剤する役割です。

現在、外来患者さまの薬は院外処方せんが発行



されていますので、保険調剤薬局の薬剤師が調剤してくれています。

### <調剤と薬の説明>

入院中の患者さまの薬は、病院の薬剤師が調剤します。患者さまが使用している薬は、病棟担当の薬剤師が、使用方法や、効果、使用上の注意、副作用などの説明を行います。また、使用中の薬で副作用が出ていないかを観察し、医師や看護師と相談しながら必要な対症療法薬を選択することも行っています。

外来ホールの薬局窓口の横に「お薬相談室」を設けています。薬について質問や相談がある方は薬局カウンターに申し出て頂ければいつでもご説明致します。

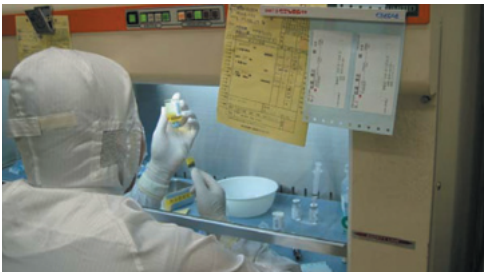


### <薬の情報>

薬の情報は日々更新されますので、毎日、最新情報を適格に収集しています。治療にすぐに役立つため、収集した情報は医師や医療スタッフに迅速に伝達しています。必要な場合には患者さまへも情報提供しています。

### <抗癌剤の混合調製>

外来や入院で抗癌剤治療を受ける患者さまの注射薬は、薬剤科の無菌室で混合調製しています。医師から治療を始めるという連絡を受けてから、薬の調製を開始して治療に間に合うようにしています。



### <薬の血中濃度>

薬物治療中の患者さまの血液から体内の薬の濃度を測って、薬が充分はたらいっているか効きすぎているかを観察しなければならない場合があります。薬剤師が測定した結果をもとに、医師と相談しながら次の使用量を決めることも行います。

### <臨床研究>

医師の協力を得ながら、薬剤師も臨床研究を進

めています。現在実施している研究は、痛み止めの治療薬や抗癌剤の効き方などについてです。



### <特殊製剤の調製>

診断や治療をする上で必要な薬のうち、市販されていない薬（注射薬や外用薬など）の調製依頼を医師から受けることがあります。薬の性質をよく調べて、有効で安全な製剤を調製するために、様々な工夫を行っています。

### <新薬開発（治験）>

当院では新しいお薬を出来る限り早く患者さまにお届けできるように新薬開発（治験）に協力しています。治験を実施している部署（治験管理部）にも薬剤師がいます。

新しく開発される薬の情報を集め、臨床試験に参加してくれる患者さまのサポートも行っています。



### <薬の管理>

薬には様々な種類のものがあります。法律で厳しい管理を求められている薬も沢山扱っていますが、必要時にすぐに使用できるような方法を考えて準備するのも薬剤師の役割です。

### <医療チーム>

当院には、よりよい医療を提供できるように、緩和ケア、感染制御、栄養サポート、クリニカルパスなどの専門チームがあります。薬剤師も専門チームのメンバーとなって薬に関する部分を担当しています。

当院には17名の薬剤師がいます。それぞれが役割分担しながら、医師が治療上必要とする薬を適格に選択し、患者さまによりよいお薬を提供できるように努力しています。